森の会ニュース⑮

MORINOKAI NEWS vol.15

2017年8月1日発行　編集・発行／森の仲間たち

I・N・D・E・X

●先生からのメッセージ…… 2〜3
●山崎仁朗先生を偲ぶ…… 4〜5
●会員だより・進路状況…… 6
●新役員の自己紹介・平成28年度会計報告…… 7
●地域科学部公開講座案内・役員紹介…… 8

平成29年度　森の会 総会・懇親会のご案内

日　時　平成29年**10月29日（日）** 12：00 ～ 14：40（受付 11：30 ～）

場　所　岐阜キャッスルイン　2F
岐阜市県町2丁目8番地　　TEL：058-212-3277
JR岐阜駅(長良口)より北へ徒歩約7分　名鉄岐阜駅(出口2)より徒歩約2分

会　費　3,000円（在学生は1,000円）当日受付にてお支払い下さい。
※会費は3,000円(在学生は1,000円)ですが、実際の飲食代金はお一人5,000円です。
会費との差額は森の会が負担いたします。

～　お子様の同伴もOK！　皆さまのご参加を心よりお待ちしております。～

同封のはがき、またはメールにて出欠をお知らせください。

ご出席・ご欠席に関わらず、同封のはがき（切手不要）に必要事項をご記入の上、ご返信下さい。なお、Eメールにてご連絡いただいても結構です。今回残念ながらご欠席の方も、是非とも皆様への近況報告をお寄せ下さい。

申込み締切　10月6日（金）

お聞きになりたいこと等ありましたら、森の会事務局までお気軽にご連絡下さい。
Tel:058-293-3021
(月・水・金　9:00〜15:00)
e-mail：mori2001@gifu-u.ac.jp

昨年は、地域科学部創立20周年記念祝賀会を兼ねて開催！（平成28年10月1日（土）岐阜大学生協第2食堂）

退職された先生や事務職員の方々にも多数出席いただき、また、地域科学部の卒業生であり落語家の桂鷹治さんによる落語も行われ、楽しいひとときとなりました。

岐阜大学地域科学部基金のご協力とお願い

地域科学部及び地域科学研究科が更なる飛躍発展を遂げ、地域社会からの信頼と期待に応え、地域社会に貢献する責務を果たすために、ご寄附をお願いします。

この基金による支援事業は、1. 学生に対する学術交流協定校への留学支援、2. 教育研究活動に対する支援、3. 産学官連携及び社会貢献活動に対する支援、4. キャンパスの環境整備・充実に対する支援等としております。多くの皆様のご協力により、本学部・研究科の教育研究活動を支援し、もって地域社会の発展に貢献しうる学生を養成するために本基金を活用させて頂きたく存じます。

つきましては、皆様には本趣旨をご理解の上、格別のご支援を賜りたくお願い申し上げます。

岐阜大学地域科学部基金のご協力とお願い
URL:http://www.rs.gifu-u.ac.jp/newstopics/2017/05/19/post-13.html

岐阜大学地域科学部・学部長　和佐田 裕昭

先生からのメッセージ

岐阜大学での33年、研究の思い出

地域政策講座 ● 近藤（こんどう） 真（まこと） 教授

来年3月定年退職です。私が岐阜大学教養部（法学講師当時）に名大（憲法助手）から転任したのは、1985年でした。それからはや33年。皆さんには、あまり知られていないかもしれませんが、ここでは私の研究についてお話したいと思います。

まず、研究で一番嬉しかった思い出ですが、2003年頃に尊敬する三並敏克先生という私の研究分野の理論的先駆者がその論文で私のドイツ研究（1984-1993名大法政論集）が日本の社会的権力論研究の出発点となるであろうと論評して下さったことでした。

ただ、すでに1988年からNZ（ニュージーランド）憲法研究に着手していたので、ドイツの社会的権力論研究は後続を待つしかありません。1996年に私はNZの首都の国立大学法学部に留学を果たした後、数多く論文を発表し、今ではNZ学会の会長をも務めています。そして現在『ニュージーランド憲法概説』の著述中です。

当時、なぜドイツからNZの研究に移ったかというと、元々私にとってドイツ法研究とイギリス法研究は車の両輪であったことが下地ですが、1988年に岐大組合書記長としてニューヨークの第三回国連軍縮特別総会に派遣され、その総会でNZ政府代表団（ケイト･デュース博士現カンタベリー大学平和学講師）の非核法制定報告と世界から核兵器を一掃する宣言を聞いて非常に衝撃を受けたことが序曲でした。それまで私のドイツ研究では、キルヒハイマーなどドイツ左派憲法学について特に関心が深かったのですが、1989年の東欧革命と世界社会主義体制の崩壊のショックで研究がストップしたとき、一転アングロサクソンNZリベラリズムに強い関心を抱くに至ったことが転換の直接の理由でした。

それで、特になぜ原爆で勝ったはずの戦勝国NZで反核法ができるのか、アメリカとの軍事同盟ANZUSが崩壊してもなお反核を貫けるのはなぜか、その憲法思想は何か、を研究するためにNZ留学しましたが、そこで私の視界は開け、既成の価値観は大きく転換させられました。

留学中にIPB（国連NGO国際平和ビューロー）の共に当時副会長であったケイト･デュース、ロバート･グリーン夫妻の知己を得て、今も憲法第9条をユネスコの世界記憶遺産にする運動で彼らと共同しています。ケイト･デュース博士の2008年の来日時には、彼女の主導により1996年の国際司法裁判所に核兵器の国際法違反判決を出させた世界法廷プロジェクトの成果について地域科学部でも講演して頂きました。かくして私のNZ憲法研究留学も世界平和と岐阜大学の国際化への貢献に少しは役立ったと思います。

そのことから教訓としては、研究者には長期留学が保障されるべきと思います。それを文部省が2003年に廃止したことは教育立国路線からしても最大の失策です。その復活（文部省長期在外研究員制度）はどうしても必要だと思います。

今夏NZに渡航し国際学会出席の折に地域科学部とNZの大学（マッセイ大学）との交流協定ができないものか調べてきます。今後とも地域科学部の発展に尽力したいと思います。

（19 JUN 2017・こんどうまこと・憲法学）

地域科学部の入学試験

地域文化講座 ● 稲生（いのう） 勝（まさる） 教授

現在、地域科学部の入学試験は、前期、後期、推薦Ⅰ、推薦Ⅱ、帰国生、社会人、私費外国人留学生、3年次編入と8種類となっている（さらに大学院の入学試験も）。一部マスコミで入試ミスが倍増と報道されたことがある。しかし、かつて国立大学入学試験がⅠ期校、Ⅱ期校として実施されていた頃は国立大学の入学試験は年に1回だったのだから、試験が8倍になって、ミスが2倍にしかなっていないということはミスが激減したと言われてしかるべきだが、そういう評価はあまり聞かない。入学試験とは、どんなにうまくやれても褒められることはなく、ミスをすれば徹底的に責められるという仕事なのだろう。

昨今、マスコミでも報道されているが、大学入学試験の変更が言われている。文部科学省の下に高大接続システム改革会議が開催され、最終報告も出された。高大接続システム改革会議は、途中、さまざまな議論がされた。センター試験のマークシート方式に対し記述式にすべきだとか、面接、集団面接を実施すべきだとか、ボランティア活動、クラブ活動などを数値化、点数化して評価だとかなどなどである。そして、最終報告と言っても最終的でなく、今後の検討課題が多数あるのだが、最終報告では、センター試験に代わる大学入学希望者学力試験では、記述式は、数学と国語だけで、国語については字数も100字前後、採点は業者と言われている。英語は、業者試験の導入とされ、細かい点数ではなく段階評価で、と言われているが、現在、候補に挙がっている業者試験は6種類ほどあり、そこから絞り込むそうである。

地域科学部の入学試験は、推薦Ⅱを除けばすべての試験で、小論文試験を課してきたし、前期、後期以外の入学試験は面接を必ず実施している。また、面接の際に、ボランティア活動、クラブ活動などを評価している。その意味では、先取りしてきたと言えよう。が、実際は、どうなっていくのだろうか。今後を見てほしい。

Goodbye! / Hello!

地域文化講座 ● 中川（なかがわ） 一雄（かずお） 教授

上のタイトルで使ったスラッシュは、近年多用されるようになった便利な記号であるが、両義的である。andとor、異なる意味を同時に指示するからである。いかなる言語記号（語や文）にもこの両義性、意味の多層性があるのだが、とりわけ詩的言語の「曖昧性」つまり言語記号の重層的な意味作用に関心を持ち、日本や英米の詩を読むよろこびを感じていた大学院生の頃を思い出す。“bare, ruined choir” このフレーズが「廃墟となった教会の雨ざらしの聖歌隊席」から「詩人シェイクスピアの毛が薄くなり混乱した頭」まで十通り以上の意味解釈が可能であることにわくわくした日々を思い出す。

読むよろこびは、人（詩人）や時代・社会のコトバとの間で想像力を通じたコミュニケーションとなり、個別性と普遍性をあわせもつ多層な「文化」への探求となり、その探求の一端が教育や研究の場で小さく響くぼくのコトバとなった。そのコトバが響くのも今年度かぎりだ。同僚や学生のみなさん、サヨウナラ！

しかし、今の日本社会でコトバの記号性・曖昧性を悪用してはびこる欺瞞的な政治の言説には、よろこびの対極である怒りさえ禁じ得ない。その一端を挙げれば、（社会的・政治的責任を放棄した）障がい者「自立支援」法から（対外戦争を可能とする）「安全保障」関連法、（人々を監視・管理・処罰する）テロ等準備罪法から（戦力不保持を残しつつ戦力である自衛隊の明記をねらう）憲法「改正」案まで、その欺瞞性と（憲法違反である）犯罪性はみなさんもよく理解しているところと思う。そういう社会の文化的風土に、よろこびをもたらし文化の発展を促すコトバや批判的知性が育まれるはずもなく、大学でも自律的・民主的に教育・研究に携わることを抑制する状況が生まれている。怒りを越えて絶望すら覚える。

絶望の中にあっても小声を上げたいと思う。来年からは市井の一滴となるが、その落滴が小さくとも響くことを願う。この願いを抱いて、同窓会のみなさん、コンニチハ！ぼくからの手土産は、英詩の次のスタンザです。折にふれ心に響いた詩の一節です。

> I will not cease from Mental Fight,
> Nor shall my Sword sleep in my hand,
> Till we have built Jerusalem,
> In England's green & pleasant land.
> (William Blake, *Milton*, 1804)

“文理融合” 奮闘記

地域環境講座 ● 應（おう） 江黔（こうけん） 教授

地域科学部設立時、私は工学部の応用情報工学科から移ってきました。情報工学は、言語学者Chomskyが1950年代に発表した生成文法の理論もその基礎理論の一つですから、ある意味文理融合の分野とも言えます。この背景もあって、“文理融合”という地域科学部の理念は魅力的でした。しかし、私は当時、システムの理論を研究しており、できるだけ他人があまり使わない数学の方法を使って勝負したいと考えていました。この考えは確かに有用でしたが、学生の指導にはあまり適切でなかったのです。研究と学生指導をどう両立するかだいぶ悩みました。また、数理関係の授業にも学生に理解しやすい使い道や他科目との関連性の説明が必要でした。地域科学部の開講科目体系に基礎を置き、多様なアプローチが可能なテーマはないか、いろいろ模索しました。そこで、隣の研究室の宮城俊彦先生から交通理論を紹介されました。交通も一種のシステムであり、複数の領域と関連しています。さっそく図書館に通って文献を読み、交通網最適化の数理解析手法を考案して、論文を書き、“交通研究”を標榜するようになりました。

しばらくしたら、２名の学生が私のゼミに入ってきました。卒業研究は鉄道システムのあり方をテーマにしました。歴史や経済、制度などに関わり、簡単に結論が出せるテーマではなかったのですが、それ以来、関連領域の先生方からも助言を受けたり、本を借りたりして、学生と一緒に鉄道・交通の課題を多面的に研究してきました。社会的課題を考える機会が増えるにつれ、社会・人文科学の結晶を理解することの重要性が分かってきました。学生時代に基本的な古典的著作でも読んでおけば良かったのですが、今はとても十分な時間が取れないのです。一方、学生の皆さんは多様な科目を履修しており、私より良く知っていることが多く、当初意図した多様なアプローチにはいささか近づけたではないかと思います。また、交通は人口や産業の分布とは相互依存の需給関係にあります。この関係性を軸に、社会・環境からみて“交通と地域の望ましい形態とは何か”のテーマについて、学生と一緒に面倒な資料収集・データ分析を重ねてきています。

一緒に奮闘してくれた卒業生の皆さんに大変感謝しています。

ドイツにて

山崎仁朗先生を偲ぶ

平成 29 年 1 月 8 日
山崎仁朗先生がご逝去されました。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

山崎さんへ

白樫（しらかし）　久（ひさし）　名誉教授

突然の訃報に驚いています。昨年6月、君からの病気の知らせを聞いて、学問への意欲と山で鍛えた体力で必ず回復すると念じ、今年の年賀状で“何とか職場復帰に努めている”と書いてあったのでほっとしたばかりの、あとの知らせでした。

思えば君との岐阜大での7年間、新設の地域科学部、そして地域社会学研究室の創設は、苦しみもありましたが私の最後の楽しい研究生活でした。岐阜に来る前には全く知らない二人でしたが基本的な研究方法が一致し、意欲的な学生諸君をゼミに迎え、岐阜市内、県北の郡上地域、そして北海道と、時には学部の学際領域の諸先生と共に調査を実施し、研究を進めることができました。郡上の和良村の研究などは意義深く、そして楽しいフイールドでした。これらの研究は、充分なものとはいえませんが著作、報告書、学生、院生の卒論、修論にその成果を残すことができました。山崎さん、こうした地域科学部での私の研究生活は、若いあなたとの意欲的な共同研究が大きな支えとなり、豊かなものにさせていただきました。あなたは、それ以外にドイツの地域社会研究を独自の領域として進めてきまして、この面での成果も沢山蓄積していました。日本とドイツの地域社会調査をベースに普遍的な地域社会論を創るのが君の構想だったのでしょう。

山崎さん、君とは一緒に随分、山に登りました。30代まで君は、正月は南アルプスの雪山で過ごすのが慣例で、岐阜大に来てからもしばらくは大晦日前後からいなくなっていましたね。北海道から来た私は、北アルプスはあこがれの山で、双六岳から三俣蓮華は奥穂高の雄大な山行だったし、白山、新潟県の雨飾山と歩き、近くの能郷白山や鈴鹿山脈なども良く入りました。若い君に山でついて行くのは大変でしたが、楽しい山行でした。こんな君ですから、まさかこんなに早く病魔が襲うとは考えられないのです。

沢山のやりのこしたことがあったでしょう。私が退職した後、社会学の鈴木栄太郎の岐阜高等農林時代の文書を見つけ出し、栄太郎氏についての新しい研究を手掛けていました。栄太郎の足跡を追っかけて札幌にきて北大時代の栄太郎氏の助手だった北大の元教授笹森さんを訪ねたのが君との最後になってしまいました。その一部は、村落研究学会で発表したようですが、これなども研究半ばであったでしょう。一昨年は私も所属していた“村落社会研究学会”を岐阜で開催しましたが、多くの地域研究者が君のこれからの活躍を期待していました。登りたかったアルプスの山々、北海道の山にも入りたいと云っていたのに本当に残念です。このまま別れてしまうのは、とっても寂しいです。またどっかで逢いたいね。

※本原稿は、山崎先生の葬儀での弔辞を本人の了解を得て転載しています。

山崎さんと一緒だった実習とまちづくり

地域政策講座　富樫（とがし）　幸一（こういち）　教授

山崎さんは元の教養部時代に最後の頃に、名大の助手の当時、非常勤で来ていただいていたのが最初のご縁でした。地域科学部が立ち上がってすぐ「これからだ」ということで、せっかく、同じ学部にいろいろな分野の人が集まってるんだから、何人かで実習も一緒にしようと、駅前から柳ヶ瀬までの徹明地区でやったのがスタートで、その後、どんどん手を広げて行きした。同時並行で、2001年からのまちづくりセンターでの景観のサロンは、13年間、毎月、続けていました。

今、だいぶ知られるようになった、古い町家が残っている川原町でも、実習で聞き取り調査をしながら「まちづくり協定」をつくるのを手伝い、電柱をとる委員会をまとめ、今の「ホッとする」町並みになりました。川祭りでは，学生と神輿を持ち出そうと言い出してやったりしました．葬儀の時には，まちづくり会の事務局長の玉井さんや，岐阜小のコミュニティスクールでも一緒だった藤沢さん，そして岐阜市の職員の皆さんが参列してくれました。

まちづくりや地域との関係でもそうですが、「じゃあ、それはこうしましょう」とかいって、どんどん先に行ってしまうので、ついていくのが大変なのも、また山崎さんらしいところでした。山崎さんが関わられたことや、きっかけをつくられたことが、町や地域

の中に形としても、記憶としても遺されています。

岐阜市の総合計画のアンケートやワークショップも請け負い、こちらも夜の仕事のあと、何度、飲んだか分かりません。遺影の写真は、右手にビールのジョッキを持っているのを選ばせてもらいました。写真を探していたら、ビール、ワイン、ビール、そんなのばかりで、それも山崎さんらしいんですが。

岐阜や各地での調査、ドイツとの比較、方法論もまとめなければいけないはずだったのですが、これは関係の皆さんで今，検討中です。「まだまだ、これから」という時に、終わられてしまったことは、とにかく無念だったのではないでしょうか。

第1期生　都築（つづき） 尚子（なおこ）

山崎先生は折々に病状を知らせてくださっていました。知らせの終わりには必ず、「復職する」「退院する」など前向きな言葉がありました。生きることへの強い信念を感じていました。見舞いは遠慮するとの内容も知らせにはありましたが、そろそろ様子を伺いに行っていいかしらと考えていた矢先の訃報でした。

訃報をうけてしばらくは、「先生、まだまだはやすぎますよ」と何度もつぶやいては浮かんでくる思い出に、悲嘆にくれることもありました。

私は、ゼミ生ではないのにゼミに参加してご指導していただいていました。調査で各地をご一緒させていただきました。厳しく・容赦ない勉強会のあとは、一変、豪快な笑いのたえない飲み会にうつり、楽しく、有意義な時間を過ごしました。先生のご自宅でひらかれた花火大会の鑑賞会は、本当に楽しく、卒業後も参加していました。

頭には沢山の事柄が浮かぶのに、書こうとするとまとまりません。今はまだ、ただただご冥福をお祈りすることで精一杯です。

山崎先生、本当にありがとうございました。

院第15期生　橋本（はしもと） 竜一（りゅういち）

私は、2015年4月に岐阜大学大学院に入学し、以降2年弱の間、山崎先生にご指導いただきました。一言で振り返るならば、その間、先生は常に走り続けていた、そんな印象が残っています。それは言い換えるならば、学問に対して常に真剣な姿勢で向き合っていたということだと思います。だからこそ、研究意欲やアイデアが絶えず、それを追いかけ続けていた、そんなふうに私には見えていました。

また、座学と実地調査の両立というのが先生のスタイルでした。大学内における座学では、学問への熱意のあまり時に厳しい指導をいただくこともありました。同時に、調査に赴いた際は先生が、調査に関わった方々とお酒を飲む姿が定番となっていました。そのような酒盛りに参加して、調査だけでは分からない側面をかいま見ることができると私は感じていました。先生としては単純にお酒を飲むのが好きだっただけなのかもしれません。

私の卒業論文作成にあたって先生は、ご自身が入退院を繰り返す状況の中、最後まで主査を務めようとしてくださり、結果的に、心配ばかりかけることとなってしまいました。完成したものを先生に読んでいただくことはできませんでしたが、多くのご助力により無事に論文を書き上げられたことが、ほんのわずかでも先生への恩返しになることを願っています。

「山崎仁朗先生を偲ぶ会」のご案内

岐阜大学地域科学部教授・山崎仁朗先生は、かねてより闘病生活を続けながら、ご専門である地域社会学の研究と教育に邁進されていましたが、残念なことに昨年末に体調を崩され、去る１月８日朝岐阜市内のご自宅にて逝去されました。

このたび、ご遺族と相談のうえ、「山崎仁朗先生を偲ぶ会」を下記のとおり執り行うことと致しました。「偲ぶ会」は、山崎先生の研究業績を振り返り、偲ぶ、研究会形式の第Ⅰ部と、会食しながら先生の在りし日の思い出を語り、その学問とお人柄を偲ぶ第Ⅱ部の二部構成とさせていただきました。

つきましては会場準備のため、御参席いただける方は事務担当の小西（メールアドレス ykonishi@gifu-u.ac.jp）宛に、第Ⅰ部・第Ⅱ部それぞれについてのご出欠を明記の上、ご連絡いただければ幸いです。

なお、恐れ入りますがご連絡のメールは、８月末日までにお送り下さいますようお願い致します。

記

日　時　平成29年9月30日（土）開場・受付　13時から
　　第Ⅰ部　14時～17時　　第Ⅱ部　17時30分～
会　場　ホテルグランヴェール岐山（岐阜市柳ケ瀬通６丁目14番地）
　　http://grandvert.com/access/
　　第Ⅰ部　2Fカルチャーホール
　　第Ⅱ部　3F宴会場

第Ⅰ部　「社会学者・山崎仁朗先生が残されたもの」
　　牧田実氏（福島大学人間発達文化学類教授）
　　富樫幸一氏（岐阜大学地域科学部教授）
　　白樫久氏（岐阜大学名誉教授）
　　パネルトーク、質疑応答

第Ⅱ部　「懇親会」（会費８千円）

なお、当日は平服でご参席賜りますようお願い致します。また、ご香典、供花・供物などは固くお断り致します。

岐阜大学地域科学部・学部長　和佐田裕昭

会員だより

第4期生　市川 福太郎（いちかわ ふくたろう）

皆さんこんにちは。土岐邦彦教授の研究室に所属し2004年3月に卒業した市川です。私は卒業後、本学からほど近い本巣市役所に入庁しました。入庁して14年目。基礎自治体の行政マンとして、住民に一番近い立場でまちづくりの仕事に携わっています。現在は企画部門に所属し、市民協働や移住定住促進など、地方創生関連の業務を担当しています。

私が担当している業務の一つに「地域おこし協力隊」という制度があります。これは、都市部から過疎地域に移住した若者を、市が地域おこし協力隊員として委嘱し、地域住民と共に地域活性化活動に取り組んでいただきながら、地域への定住・定着を図るものです。本市では現在、過疎化が進む北部地域に4人の隊員を受け入れています。名古屋市出身で就農希望のT隊員は、着任早々「竹でビニールハウスを作りたい」と、獣害に苦しむ地元農家の畑に、竹ハウス(KAGUYAと命名)を建設するプロジェクトを立ち上げました。T隊員は早速、地域住民とともに竹を切り出し、設計士の協力も得ながら、建設作業に地元の人が参加しやすい仕組みを考えました。作業はワークショップ形式で行い、市内外から60人以上が参加。放棄された竹林が活用され、建設をきっかけに地域がつながるプロジェクトとなりました。

その他の隊員も、空き家や空き公共施設を活用してゲストハウスやシェアオフィスを整備するなど様々な取り組みを進めています。私は、活動を支援し共に進めていく立として、個性豊かな隊員たちに刺激をけつつ、彼らと共に小さな成功体験をみ重ねながら、主体的な地域づくりをめられるよう努めていく所存です。

皆さん今後の本巣市にぜひご注目ださい！

竹のビニールハウス内で隊員や地域住民らと作業する筆者（右から3人目）

進路状況

学部進路

2016年度卒業生進路状況（2017年5月1日現在：カッコ内は人数で1名の場合は省略）

公務員(28)
金融庁
国土交通省(2)
厚生労働省(2)
岐阜県警察
愛知県警察(2)
岐阜県(4)
愛知県(3)
福井県
岐阜市(3)
本巣市
関市(2)
名古屋市
一宮市
犬山市
四日市市
津島市
大治町

医療・福祉・教育業(11)
医療法人岐阜勤労者医療協会みどり病院
医療法人尾張健友会 千秋病院
独立行政法人岐阜県総合医療センター
NPO法人MOVE
国立大学法人岐阜大学
学校法人愛知医科大学
学校法人大同大学
学校法人藤田学園
学校法人名城大学
川瀬ギター教室
教育関係職員

建設・製造業(12)
トヨタホーム名古屋㈱
昭和コンクリート工業㈱
㈱サンビシ
大垣扶桑紡績㈱
㈱川本産業製作所
大同特殊鋼㈱
リョーエイ㈱
日東工業㈱
㈱デンソー
㈱東海理化電機製作所
トヨタ車体精工㈱
日本特殊陶業㈱

卸・小売業(8)
㈱ATビジネス
㈱スズケン
㈱日本オプティカル
㈱キュービィクラブ
㈱八神製作所
㈱スギ薬局
㈱バローホールディングス
ゲンキー㈱

不動産・物品賃貸業(0)

運輸・情報通信業(23)
西濃運輸㈱
東海旅客鉄道㈱
東陽倉庫㈱
名鉄観光バス㈱
㈱カーネル・ソフト・エンジニアリング
㈱アクア
㈱セイノー情報サービス
㈱トヨタコミュニケーションシステム
㈱ファブリカコミュニケーションズ
㈱ボルテージ
㈱一
㈱大塚商会
㈱中広
㈱文溪堂(2)
コムチュア㈱
シーシーエヌ㈱
スターキャット・ケーブルネットワーク㈱
共立コンピューターサービス㈱
住理工情報システム㈱
中部テレコミュニケーション㈱(2)
豊田ハイシステム㈱

複合サービス業(3)
愛知西農業協同組合
愛知県警察信用組合
日本郵便㈱

金融・保険業(16)
㈱十六銀行
㈱大垣共立銀行(4)
㈱中京銀行
岐阜信用金庫(2)
瀬戸信用金庫(2)
㈱ゆうちょ銀行
㈱福井銀行
愛知県信用農業協同組合連合会
あいおいニッセイ同和損害保険㈱
損保ジャパン日本興亜㈱
住友生命保険相互会社

サービス業(3)
大進精工㈱
リゾートトラスト㈱
独立行政法人
　高齢・障害・求職者雇用支援機構

進学(3)
岐阜大学地域科学研究科
名古屋大学大学院教育発達科学研究科
中央大学大学院経済学研究科

卒業生数	119	進学者数	3	就職率	94.55%
就職希望者数	110	進路未定者数	7	（就職決定者数÷就職希望者数）	
就職決定者数	104	その他	5		

研究科進路

2016年度修了生進路状況（2017年5月1日現在：カッコ内は人数で1名の場合は省略）

運輸(1)
西濃運輸(株)

情報通信業(2)
テレコムサービス(株)
(株)サンテック

卸・小売業(1)
イオンペット(株)

進学(0)

修了生数	12	就職率	66.67%
就職希望者数	6	（就職決定者数÷就職希望者数）	
就職決定者数	4		
進学者数	0		
進路未定者数	2		
その他※1	6		

※1　社会人修了生を含む

新役員の自己紹介

第3期生
後藤（ごとう） 祐治（ゆうじ）

こんにちは。3期生土岐ゼミの後藤祐治です。

早いもので大学を卒業して14年が経ち、今年は自身4回目の年男である。30歳になって間もなく東日本大震災が起きて、これまでの金融マンから国内LED照明メーカーに転職し、天職である新規開拓の営業職を続けている。数年前から時々自身の先祖をのんびりと探究しており、後藤家は明治以前より加茂郡七宗町にルーツを持つことが分かった。私の大学合格の報告を、今は亡き祖父母が、ニコニコ黙って喜んでいたり手をたたいて喜んでいた理由も分かった。

自身が生まれつき中等度の両耳難聴ということもあり、障碍を持つ人間としての経験や視点などを生かして社会福祉に貢献するという思いで入学したはずだった。が、人生とは面白く不思議なもので、4年後の卒業の時には妻子持ちとなり、前述の通り駆け出しの営業マンとなっていた。4年次の1年間はともかく生活資金を稼ぐため、一晩中寝ずにアルバイトをし、明けて日中は充血した目で受講、就職活動、卒論作成などに打ち込む日々で、とにかく熟睡した記憶が無い。しかし振り返るとやんちゃで傍若無人な私に対して、家族や恩師、ゼミの仲間たちや同窓生など多くの方々が本当に応援してくれたのだと心底思う。あっという間に子ども兄妹2人とも健やかに成長し、将来が楽しみであるのもとてもありがたく感謝してもしきれない。

今現在は、これほどの経験や試練をくれた岐阜の地、恩師や同窓の仲間たちに感謝を込めて深い恩返しを、またこれからまさに勇気の一歩を踏み出し人生を切り拓こうとする現役生たちに熱いエールを送りたいと思っている。

平成28年度会計報告

自　平成28年4月1日　　至　平成29年3月31日

（単位：円、小文字は内訳）

●収 入 の 部

項　　目	決　算　額
会　　費（10,000円×131名）	1,310,000
懇親会費	0
受取利息	8,115
その他（ゆうちょ銀行より入金）	503,430
当 期 収 入 合 計	1,821,545
前 年 度 繰 越 金	753,838
収　入　合　計	2,575,383

●支 出 の 部

項　　目	決　算　額
事 業 費	460,551
会報等印刷費	215,568
会報等郵送費	5,829
卒業・修了祝会祝い金	100,000
地域科学部基金賛助金	139,154
事 務 費	430,470
人件費	362,041
事務用品費	6,804
通信費	31,021
その他	3,604
会 議 費	101,284
諸会費	4,000
役員会雑費	29,184
交通費	68,100
総 会 費	43,772
総会経費	0
懇親会経費	43,772
予 備 費	0
当 期 支 出 合 計	1,009,077
当 期 予 備 費 合 計	0
支　出　合　計	1,009,077

項　　目	収入の部	支出の部	差 引 計
次年度繰越金	2,575,383	1,009,077	1,566,306

●資産保管状況

項　　目	現　在　高
現　　金	0
普通預金	
十六銀行	1,566,306
ゆうちょ銀行	0
定期預金	
十六銀行	8,000,000
合　　計	9,566,306

平成29年度　公開講座のご案内

主催：岐阜大学　企画：地域科学部

地域科学部の授業

開催日／10月14日（土）、21日（土）、28日（土）
時　間／13:00～16:30（各講義90分）

10月14日土
13:00～16:30

牧　　秀樹 准教授（言語学）
「言語学入門」

笠井　千勢 准教授（言語学）
「第二言語習得論」

21日土
13:00～16:30

野原　　仁 教授（ジャーナリズム論）
「情報操作とやらせ」

加藤　公一 講師（現代史）
「原爆投下の世界史」

28日土
13:00～16:30

西村　貢 教授（財政学）
「人口減少社会の暮らしと制度改革」

應　江黔 教授（交通科学）
「交通と地域」

会　　場／岐阜大学地域科学部101講義室
対　　象／高校生以上
募集人数／100人（先着順）
受 講 料／無料
申込期限／９月29日（金）

申込方法／住所、氏名、年齢、電話番号、職業、車での来学の有無を明記の上、郵送・持参・FAX・E-mail のいずれかの方法でお申込みください。

問い合わせ先　〒501-1193　岐阜市柳戸１番１　岐阜大学地域科学部総務係
Tel/ 058-293-3003　Fax/ 058-293-3008
E-mail/ chiiki@gifu-u.ac.jp

平成29年度 森の会役員

会　長／浅井　彰子①
副会長／淺野　善信①　都築　尚子①
幹事長／中山　智隆③
幹　事／伊藤　雅浩①　小澤和歌子①　眞鍋　陽子①　後藤　祐治③　笠原　正博⑩
平野　純里⑪　藤井　敬子⑪　野村　惇貴⑫　小塩　里予⑭　西野　公美⑭
会　計／荒瀬　修三③　伊藤　未有⑮
監　査／祖父江利佳①　伊藤　健人③
（氏名の後の○の数字は、期生を表します　①…第1期生）

森の会 会員数 2,101名
（平成29年4月1日現在）

森の会の皆さま、いかがお過ごしでいらっしゃいますか。
森の会は、2016年度の大学17期ご卒業、大学院15期ご修了の新メンバーをお迎えし、正会員の総勢2,101人の同窓会となりました。少しずつ、大きな森に成長しています。
森の会の活動の中心は、年に１回の総会・懇親会。学際的な地域科学部らしく「異業種交流会」のような楽しさがあります。また、先生方とも社会人としての会話が弾みます。
お越しになっていただきやすい岐阜駅近くの会場です。今年も多くのご出席をお待ちしております。おおいに語り合いましょう。
皆さまがこれからもお健やかに、素敵に活躍されることを祈りつつ、秋の総会・懇親会での再会を心待ちにしております。

森の会 会長　浅井（あさい） 彰子（あきこ）

森の会では、みなさまからの近況報告、ご意見・ご感想を募集しております。
メールまたは郵送にて下記宛先までお送りください。

連絡先

森の会（岐阜大学地域科学部同窓会）
〒501-1193
岐阜市柳戸1番1　岐阜大学地域科学部内
TEL：058-293-3021
FAX：058-293-3008
E-mail：mori2001@gifu-u.ac.jp
事務局業務日（月･水･金　9:00～15:00）

森の会アドレスに簡単にアクセスできます

地域科学部創立20周年記念祝賀会の様子
（平成28年）